



四
 編
 奇
 傳
 卷
 驚

13
 3156
 6



3156

Handwritten text in cursive style (sōsho), likely a commentary or a related story. The characters are dense and fluid, with some larger characters for emphasis. The text is written on aged, slightly stained paper.

開卷驚奇俠客傳第二集卷之四

新儀

東都 西亭主人

編次



第十七回 滿泰駕を駐りて壯士と見る 助則馬を走りて奸黨を捕ふ

Main printed text of the chapter. It includes the chapter title and the beginning of the narrative. The text is in vertical columns, reading from right to left. The characters are in a standard printed font (kuzushiji).



Vertical text on the left margin, possibly a reference or a note.

Vertical text on the left margin, possibly a reference or a note.

何事と駭然と推退けんとせける。満泰妻時と喚禁め何人知れど大事の
 訴訟ありしに轎子と駐させ仔細を聞き速の指揮ありし。一個の老
 黨言ゆり立て先姑且留りねと喚りて皆齋一後方とせし。其後對ひ
 主居る。登時一個の青侍小六が身邊小走り來て。對ひて和殿を何
 処の人氏ぞ目今何等の直訴ある。姓名宿所夙意の趣且听下と御覽具
 上られし。小六も合は笑て仰せ給ふ。庵身の團司と舊縁あり。嗚呼
 ども素生と明世新田の一流紳約に大人の由縁也。連小六と喚做す
 東國を人成りし。知召せ給ふ。身小着る證據あり。とひし。腰短刀
 中を合より推立て。這個後村上天皇の脇屋刑部卿助の賜りたる菊
 一文字の御劍。這義の團司も口碑あり。知食て在る。是を御覽入
 坐釋るの餘の一談の見参る。人信陳る。這意も披露願ふ。との余

件の青侍の沈吟々と點頭て余の短刀を某姑且預りて。宣は披露せ給ふ。と答
 駭て短刀を受令りて遠く轎子の頭をありて。小六がひつる趣を箇様々と告
 那短刀を存せ給ふ。これは満泰の听き給ふ。今令りて現は菊一文字の御劍の准後親の日
 記を寫されて。俺の年来知れ給ふ。今令りて疑はれ給ふ。那社の脇屋義隆の餘の類を
 證据既分明に對面せ給ふ。あらむに發見を建せ給ふ。と詞を宣示し。短
 刀を青侍に遞して。轎子をあらむに青侍の衣を小六が身邊に赴りて。團司對面を
 氣色を既しと満泰の主の身邊に杖を近着程に老黨若黨をのの伴當主を
 守護を魏を堂々と威羅列を中に満泰の主の小六を相て發見を放ち釋讓し。と
 此を招きて。小六を一声向て。汝を朝に跪せて。逆旅の浪人必ず料を呈して。御覽を
 犯して。大胆を忠告し。請稟せし。幸ひと。退番られ。速に對面し。允さ給ふ。と

りてその意を聲を勇士の魂世に又傳りて其の聲も亦く頭下と側聞せ伴當
們の面を照し自ら注しと俺君侯の死理會のめあわんと思ひける満泰去はんと所
は眉をうち頻りていり趣あるるるかあり御高木楢城守延が女兒の性方と素難て
そと木造泰勝の所為を告げしと告訴せし折則泰勝を召問く然而對決あ及びりも
素より證據なきを只守延が推量の臆説をも争何せんよとを説と退と訴
状返せし又守延が横死の光景ある山賊の所為を地方の民們が稟書より有
司の命一親兵と申して緝捕し由断るるりかかぬとを賊と權然を和殿を以僻
めて然又泰勝と敵をせんとして中途の噉訴大人氣を正に證據あるあを狂人を趕
んとて不狂人も走るあ似り誰う疎忽といふるにそを思ふ優とあふとと鷹鷹揚あ
たむ既の立すくせしと小六も無母時と推材めて脚説のいふも晩生他御の人とと
る駕と犯す訴し證據もて聽きん那泰勝が隱悪は則他家の若黨山勝杉内

奴隸敵介這個二名の招をも緯既小介明を故の箇様々と地藏堂の乾井の内
捕執措たる顛末を詞せし演説たる疑々思ひぬ俱なる小厮を案内に充
死伴當を遣されて牽出きて尙せ鄙語の論より證據今あり辯及ふとみ
か向せぬまどとられて満泰敬驚は羞てあうん俺俺行は鳴平行はあまらぬと吐き
邊く伴當を遣して英虞將曹明星三郎若們の那里も十字仏堂快赴て連
生を生拘らるる罪人們を牽りて來よ快々せと火急の主命兼りぬと心も果を身
起す件に二名の雑色奴隸を相役へ然而唐吉と案内の地藏堂をたれ野井
石を蓋くあの那杉内敵介の這井の内を唐吉が大家をたれ石を拾んとを
も些も動ざらけれ緯の筆は這石と誰が拮據あるや向へ唐吉微笑て敵人を捕り
素わの俺東人のひとりあ合の卸も素あいたと素大家駭呆れて然和郎が主人の
什麼幾人のちつちつあらんちつちつあらんちつちつあらんちつちつあらんちつちつあらん

徳川家康公御遺言

徳川家康公御遺言



天保二年

五



此殿かまの心もみちうかむらん
ころくみちみいせのちくしん
小六途謁伊勢国司
ひんしんはまきまよとありはる

おご曹

方屋三郎

小六

有像第廿三

依勢国伊勢郡

伊勢国伊勢郡

病の假托將息の與と唱て夜も日も千枚の別荘に在る。其の醫首師の誨る那山瀬を
 獲まき内々若黨内におるるさて奴隷敵介共信の山瀬をよそ今朝未明と近
 此高峰へ遣したる。介後亦泰勝の獨作之めまき。さかたに那山瀬の即效至妙との
 とも。這頭の山なる東西をさつと功をたかめ。けし且術を以て信夫が親守延の横
 死のよと報知して靡ふ為ふ力盡して仇を穿徹金の撃果と怨と誓ふる存心と
 いる必親の與に俺をさつと做さしめ。這計畧の捷徑を孝女に弱く做さしめ。即
 效の山瀬の復優劣のさるる鳴平介と肚裏の處致をき。決りけれ日屬信夫戎
 隠一措く。矮樓に登りて現る信夫の衣より被れて臥る。隨に睡りも甘む。涙流るる。塗枕の
 裏見の曝布の外なる容顔毎ふ愁ひ。合て雨は惱る漁村の柳風傷る露の花も是
 中優きと看惚れる。泰勝を枕方寄添ひ。慰めて然る日守延の横死の趣
 箇様々と実事虚談口信と報知ら。又さき。是等の事。那折は快知せん。身のみも。

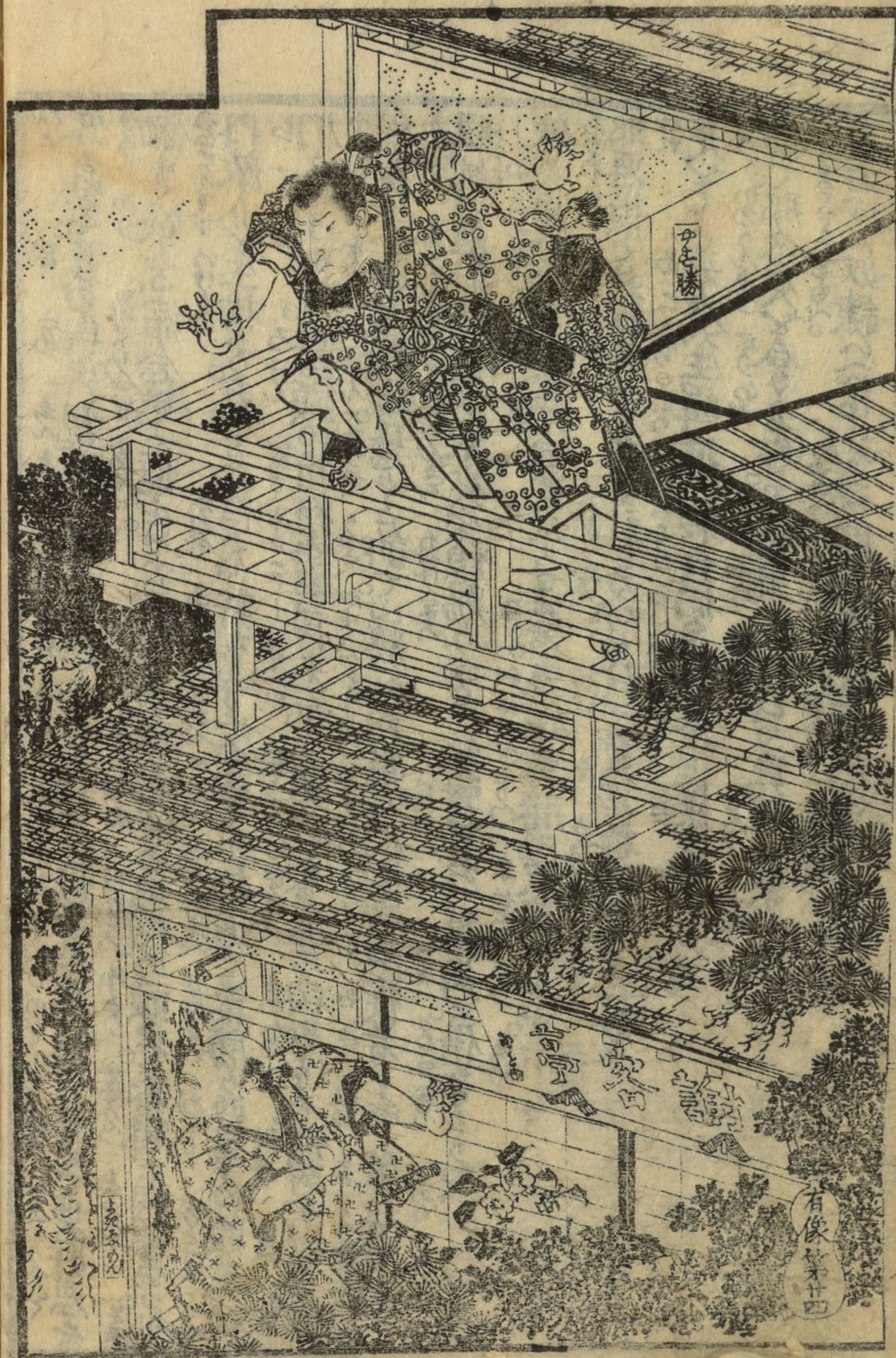
只山賊の所為との。さして仇の安定する。な。歎息をさる胸苦。まは。黙止せ。你的心
 ひと。俺の靡ふの山賊。是俺岳父の寃家。樹を伐草を并。拂ひて。索求め。怨を
 復さん。然れども心後ま。その身の悪事。外々。思は。被る口説け。信夫の親の横死のよを。
 少ふ。堪む。吐嗟と叫びて。身と起。又伏沈む。駭嘆悲泣。量の憂苦。流る。涙を雨より
 繁く。声を惜ま。さ。泣。才の返。け。猛然と。頭を拾。げて。蛾眉と。逆建。星眼と。睜開
 いて。信と泰勝と。疾視。し。戦と。怨と。武弁の奸賊。良家の婦女子。更奪奪。恥を知る。綺
 語。艶談。只是。人を苦。あて。身の樂と。做さ。ま。俺親の死。げ。ま。も。秘と。更。更。更。
 為。不死。心。雪。んと。り。義理。欲。斬。の。白物。女子。と。更。悔。の。返。ま。も。竟。悔。の。ん。鳴。平。哀。れ。
 る。家。の。大人。俺。身。の。所。以。い。く。の。心。苦。ゆ。夜。と。犯。七。命。果。敢。さ。ま。の。け。ん。脚。運。は。未
 して。痛。ま。けれ。什。麼。何。と。せん。ま。の。腸。と。断。つ。孝。女。の。哀。情。物。狂。く。ま。の。猶。も。怒。り。の。堪。け。り
 け。又。泰。勝。の。ち。對。ひ。て。俺。父。身。故。り。あ。り。ま。は。汝。が。殺。さ。ま。の。成。も。汝。が。悪。事。の。故。と。身。の。危

此をさへつてその禍は遇のべ然り則汝のちの事を知りて罵りと泰勝を備ふ措たる腋挿の短
 刀を撥合りて身と起して放放さんとてけり泰勝透き打落しと腕合と動せし怒
 る声とゆりて噫物々を腐女奴らに靡せんと思ひて心長雨く慰められ恩の情も辨へむ
 とての尽ふく允えやその事あるらむと結扭り足を敷系にて本意を遂人這方へ来と被立
 たすまゝとてさき
 車と角へ女子のりりふ克くもあつたれが稍振放ち極潜りとも脱る方必死の覚期
 身と汚されと矮樓る欄干の衝と足踏かて跳場ら栽稠の回撞と落さるけこの時
 ぬび 丸のりや ちのりやまののりや 撲つけ息絶る光景を泰勝
 奴婢四五名庖福のなまり走出て相れが信夫の巻石の膽とて撲つけ息絶る光景を泰勝
 木よ罵諫と泰勝の矮樓より直下り声とてけり然る諫を隠藏東西とて納戸へ
 引れて術幹とせむと諭さるる其処へ赴て又勅へさるる活き日属の心盡し画
 餅あやると吐て今や短慮と後悔の額と病と忙然る胸安らぎ思ひり佳折
 達小六助則の獨駿馬を鞭と鳴りて千紋の里る泰勝の別荘へ来られ閃りと下て

門内馬を牽入れ敷系留めて呼門のせを杖と入る一家見の奴婢の威信夫が即死を取諫
 く納戸のうまを在り外口ののまろく小六を四下と看回す矮樓中の人りとあやうく吐き
 えと泰勝あんと猜するその機を臨みて此も猶豫せし忽地は声とて木子殿を在る
 木子殿木子殿と喚ぶ泰勝の胸安らぎ思ひの折と名と喚れて心もあやうく答ふ
 小六を突然と矮樓へ登り来れば泰勝駭訝と怪し和殿の何人かと問せも果て近の死
 小六を乞と向ひて知れし俺の國司の使者達小六と喚做る原是東國の浪人木造泰勝
 罪悪ありその事露頭不及く久則國司の密意不儘と俺召捕へ與ふ来されの覚期と
 と罵ると泰勝は吐きとて駭とるる其怖も必復せし声苛めく這癡者か何ぞと
 俺身を犯せ罪あり非除その罪あるとも封疆素より四州を且りて一万五千の軍使
 の俺君の智勇の家臣置かぬ流寓りの浮浪人と見使を立られんや憶ふ汝の俺
 機密を世聞するものとして權と金と命と詭騙賊の竟胆其頭の樹小

の乗る俺もわらぬ目物とせんと短刀を引抜く勢ひで破れんとせし引外を小六も
 透さぬ肩を刃で打落しと怯む利を引肩被てちる小儘と投さければ
 真柱の頭を撲り眼眩も重き時へ起る響は駭く芥田と記右衛門は這宅を
 當奴隷まである何れを胆と潰して推續せ散動々々と大家烽火樓から登る
 中と記右衛門も真先小六登る那為体小此も礙議せ主人の冤家脱下と名
 告かけつ腋挿の刀を抜て面振る敵を小六も肩を受流し踏込て眉間を礙と打
 惱む吐嗟と叫ぶ記右衛門の憶を刃と裏里と捨て鈴釘弱腰下高蹴られ俯走
 二三間是も柱を面と撲して向齒三枚摧けられ流る血を軀より前大蘇枋の大堰
 傾けらる異る嘔吐苦む声悲しく辟未朝ひて平張る後れて来ぬ若黨奴
 隷の小六が本支胆落して只置々と罵るも推捕細言のふと找む稀も
 けり登時小六も声高き虎狼の奸黨の期も向天罰と知るや俺他郷の旅

客も義の與史親疎を擇ま弱し助け強を折免と伸怨と雪めて世の奸悪を
 鋤き欲する宿念越え行むけのれ初野井の地獄の頭也泰勝と同悪る
 内敵を生拘るあまの信夫の所在守懸敷れ趣通て泰勝が悪事の顛末他
 們が招了る露頭の折料志園司の先妣の廟所へ参詣の與出まて那野を過る
 程小庵泰勝が罪犯と恠々と許て山勝杜内敵介を園司の従者牽渡し且泰勝を
 緝捕の與則使節の木夾を預賜りてけ牽せの奴馬を借せり騎て檢査
 使英虞將曹の先を走らせ方僅泰勝使節のよも示しれぬも実事存
 那悪僕と共召するを礼さ及び己とを金掻抓て主役と投懲り疑あくと
 是も英虞生緝捕の親兵們程遠くは來るを詞せり告示し懐を極
 撈て那木夾を合せ果して疑ひも園司家傳の烙字あり実とる踞居
 若黨奴隷へのゆえ泰勝并記右衛門の這照鑑の之邊で身を起



伊呂波歌集
 卷之四

五十五

せむ撲傷の疼痛の勝れ腰を立且羞て俱頭を低て在り小六をこれぞとて
 是秦勝徒類們信夫を何処に隠る快々這里に來去とて大家語言に仰
 ていふ件の妙今ゆふ推隱と何せん信夫剛才這燈樓より落て舞臺に
 る折の秦勝の這處に存る其の故致その美し知れ又注ぎし由ひを
 嘆と已多く他命命の這里來るとの一响を命に預けし命運
 茲中端々秋亡骸をも扛て來し俺相せと急せし美しと答る中雨三名勤
 階子と下立て信夫を浦團の推包も練り推登り小六の身邊に扛居し小六を
 浦團と推包り相れは是れ呼吸絶る死顔を色も喪り送る七才より秋相
 別れも半園ても有敷糸残る幼仙良の公致とてるの画餅もるる再會の甲
 斐もさへ推隱を小六を獨村胆の心ばるる思ふ俺御言野に在り時仙良の扱
 ぬ一那仙丹の一粒茶籠の内なる御小疾吉死せ折這妙茶の奇效もて死

起しぬ例もある且仙良の示現も残る二粒の後々小用るとありて宣せしが果して錯
 今又えを用ひる信夫と故きともあんと尋思とて又衆人から對ひ信
 夫の這里より落し折窮所を撲くと死らるる那身を受た傷は是れ備良茶を用ひる
 息吹返るるもの俺幸に腰に附る茶籠奇茶あり清浄水小火を鑽搗て快の七
 來よと吩咐れ若黨一名あるる二個の奴隷共侶の邊に下立て時と程き件の
 水と茶碗汲ち折敷に載て茶くのと來しけり小六を備し措くと信夫が胸に拍
 試み聊温るけれ馳て一粒の仙丹を合出とて水と共に信夫が口に伏せ入れ仙良の黙禱
 きて姑且胸に拍る程に信夫の忽地吐嗟と叫び眼を閉じ身を起す其生れ大家より驚
 死て奇々々と稱した中雨小六を飲ひの氣色面顯れて登り信夫心地其甚麻身即ち
 る月も痛む快俺の團司の使中秦勝們が做事悪吏の既露顯れ及びいふは備良
 ひ折阿娘の剛才高はる落て身故りうらやま試み俺恩得の仙丹ありて

感謝せざるは唐吉の笑は小六の對して恭く遅参の陪話を俣の妻後方侍り。

第十八回 裡應外合法を濫る 理論方正枉を繁む

その時英貞將曹の小六が武勇の掙たての願ふ賞讃と然而泰勝も對して其身の
罪惡露頭ゆら小六を使ふ立れる君命と宣示して這別莊に在る所の奴婢の名を問人
數と糾まふと記右のつと共若黨三名奴隸の通て三名の過當又婢妾の三名ありしを
御前駭は怕れて避て那這の躰れ一個の漏ま召聚會て日屋の始末を鞫る若黨奴
隸の泰勝が信夫を奪奪せ折拘らひるものありし機密を知れしを信夫隱措
く惡事と悟るその父を恨れ主同惡の罪を免る所多一個の餘まらばと親兵の下
知て男女齊一轉々と細めて更一個の雜兵の村長許遣て信々と吩咐ける因て平
蚊の村長の時移ま莊客們は儀典三挺を吊と這別莊に來れば將曹則村長

夫役の所要と宣示く木造泰勝罪の主僕俱まらば泰勝の父親改の御不阿射
賀系赴て本宅の妻在るもの且這外別莊に在る若們姑且ち成之後の死下知
なほ一のをも行つてと町寧なるもの竹興一挺の信夫を奪奪せ折拘らひるもの
勝との無せを氣細と極非常の備と記右のつと共若黨三名奴隸の通て三名の過當
奴婢の雜兵們は這まら小六と共別莊に在る所の奴婢の名を問人
使の隨ま成る此百送憾るもの身を度と從て又那馬を跨り將曹們を
威先不立くと後より徐に拍せけるの日よりと殿迹の土良を由件のつと
六が義胆豪俠を賞讃せぬものも名神風の伊勢の事と後々あまの七
道に隱まら唐山の田仲王公劇子史も傳へたる皆其末く思ひの同話休題却
説英貞將曹の達小六と共侶の信夫と勅泰勝們主僕九名を召捕て其氣の城へ
かるまれば豫て君命と宣示する有司幾名致各々これを受合て先小六主僕を勞ひ

諸の旅舎入寮内にとりあつた。或の問注所不知仕と泰勝主僕の罪惡と糾めせしめり。登時有職の毎泰勝主僕及信夫局内召入れ先泰勝と与記右衛門の悪事の顛末を鞠回折山勝村内敵小細を備在。既他們が招了を罪惡頭の上へ泰勝も与記右衛門の頼陳をとりて皆河谷と罪伏し又いふもあつた。信夫の信夫對して日屬泰勝を合替れり。その身の始末を鞠し信夫の犯汚を自ら及ぶ。小六所癒の奇甚中より再生する輝の趣を詳し。有司門総てあつた。其の夜獄舎を繋る。泰勝并の与記右衛門の敵小六の外の主の悪と資する奴隷二名ある共主僕六名を餘の奴婢の親改を本宅に。老僕某等召出く。信と閉置措く。下知く預け遣け。小六の遺言を知り。日英虞將曹の小六が旅宿の徒然と訪慰め。昨夕泰勝主僕六名は林林樹をり。并泰勝が父木造内匠親政の阿射賀の作事。出夜の折れ。即便那首下知あり。

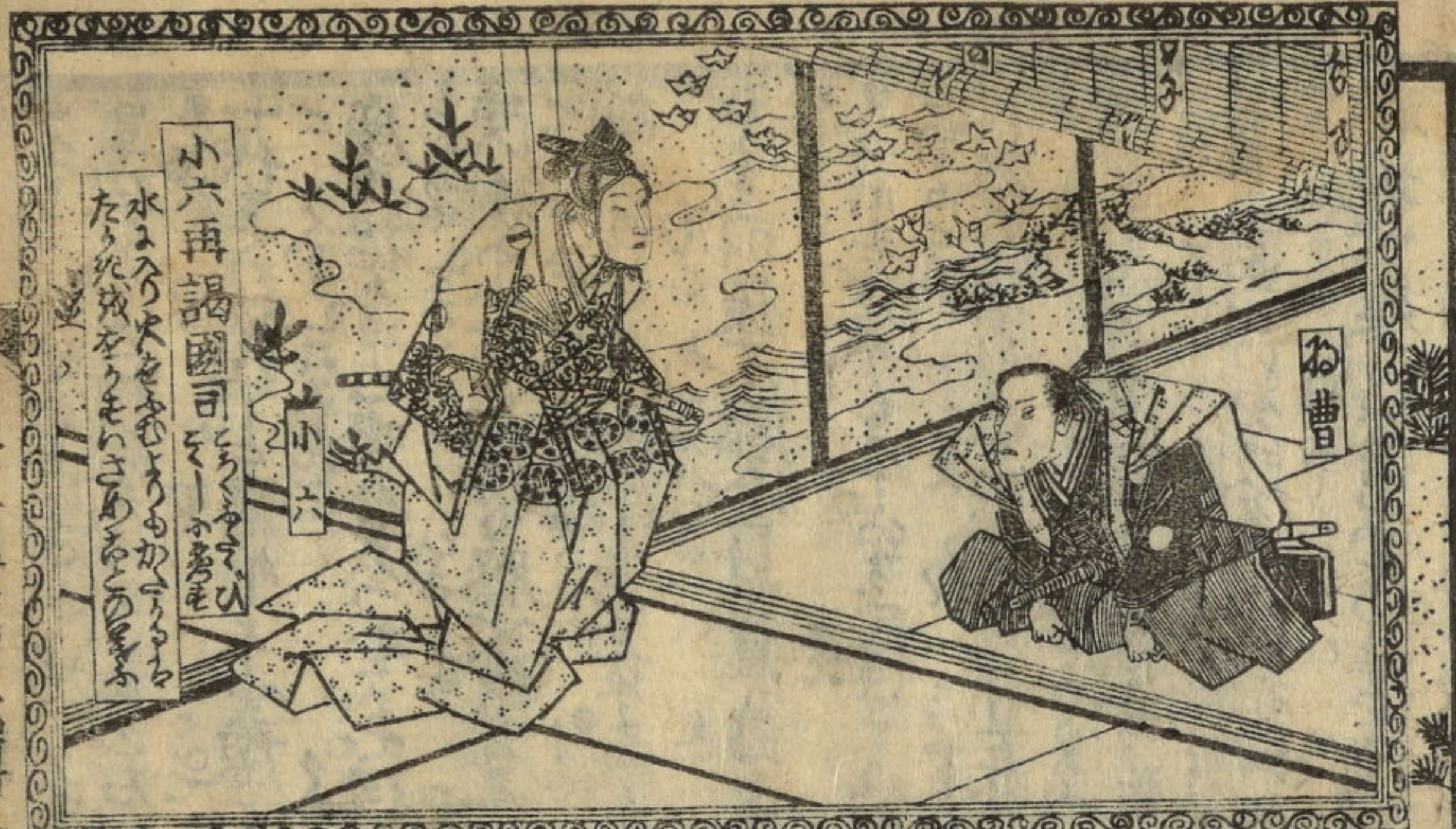
か目前を允され。終慎居ある人又那信夫の母親老樹と五柳村の長鄰人們を召寄れて。只今來れり。即便他們返る。見下知く。國司の客。脚對面あり。仰られ。昨夕も感冒あり。聊不例あり。宣せ。内意より來つ。小六を執して。慚愧する。信夫の晩生が義妹也。那養母老樹も豫示せし。送る。那首に到る。然然。這里老樹。對面をせし。國司拜見せられ。進退自由致。伴當庶吉を晩生代と。信夫母を送り。五柳村遣。將曹異議。及。依る。小六を伴當。信夫の処。便宜ある。某の先退。身邊。樹の刀自病着あり。女官の窮厄稍解。歎く。病苦を。這里。

機密と云ふ。其の筋有り司の獄卒を偏せり。人情を察し。泰勝の心を測り。毎食舎の食餌を餽て。海へ回す。其の節。地助言まなり。信り。程泰勝が做す悪吏。口那信夫の事。年未ゆ。父親改の勢。恨り。忌憚り。或人の妻妾と海濱。或民間の美女。豪奪を犯す。後返せしもの。留め。妻妾を奪ふ。今番の事。有り司亦復泰勝を獄舎に牽かす。此の虚实を鞫問せし。泰勝即便陳言す。今此鞫の趣。其一切言ひ。怨あつ。流言の信。身非し。知言飾ふ。似れ。信夫を故。奪舎せ。なる。初某媒妁。娶らんと欲せし。那親相城守。延が飽す。罵辱せり。口憎。其怒。正る。然れ。某が若黨。杜内。手記。若黨。守。射殺。其。那若黨。守。延。罵。怨。殺。後。某。告。忠。義。其。情。の。如。き。然。と。證。据。の。あ。れ。陳。言。す。甲。斐。々。と。黙。止。へ。再

度の譴責。已に陳る。所是実。願。杜内。手記。其。詳。知。其。漫。罪。犯。と。命。惜。む。わ。ね。も。あ。る。を。斧。鉞。就。親。親。姉。安。と。家。の。破。滅。及。下。這。意。を。查。し。か。と。啣。言。か。す。賴。陳。と。哀。請。を。己。の。口。有。司。の。憶。を。暗。火。と。俱。杜。裏。の。巢。を。現。這。木。造。泰。勝。不。行。状。癖。者。を。父。の。二。の。權。家。也。姉。と。館。の。脚。寵。愛。大。く。及。側。室。を。の。方。さ。る。も。俺。們。入。情。を。わ。り。今。の。便。宜。と。退。け。方。便。さ。る。怨。も。れ。身。の。上。ま。り。要。す。と。わ。れ。と。各。々。言。ふ。出。で。小。人。の。尋。思。齊。一。理。と。枉。又。獄。舎。より。杜。内。と。手。記。を。牽。出。し。て。方。僅。泰。勝。が。陳。る。趣。を。て。責。問。す。這。惡。僕。們。の。兼。伏。を。争。ひ。果。さ。り。有。司。們。連。の。焦。燥。を。拷。問。數。刻。及。及。程。杜。内。と。手。記。を。牽。出。す。苦。痛。の。堪。志。心。の。わ。き。首。伏。し。けれ。の。日。の。廳。果。さ。る。信。而。有。司。再。斷。の。趣。を。言。ふ。泰。勝。が。罪。一。等。之。降。え。と。請。直。せ。と。滿。泰。の。王。諾。と。あ。る。由。泰。勝。の。罪。の。と。も。死。す。至。る。信。夫。成。言。奪。を。り。是。賊。情。に。似。れ。る。強。姦。せ。し。め。は。是。亦。罪。重。く。守。延。と。射。て

殺し。杉内守記右衛門と市井無業。泰勝并敵介の従僕。名は五十板。皆捷懲して
追放す。その餘は各罪あり。赦す。免さ。速に下知せしめ。以てある。泰勝の婿引
板屋の方の弟の禁獄せしめ。日。因執事。眞愛。因。敢。又。召。心。せ。國。司。の。是。驚。で。局。不
立。も。病。病。を。向。て。あ。り。慰。め。あ。る。而。三。重。及。び。一。引。板。屋。の。方。の。弟。の。隨。不。與。不。愁
訴。と。何。と。口。説。ま。う。い。え。も。少。知。る。の。の。り。れ。現。女。調。内。奏。和。漢。國。家。の。救。政。中。賞
罰。是。よ。り。乱。る。と。今。子。細。ね。治。習。の。ま。れ。滿。泰。主。俱。不。息。以。便。宜。も。の。泰。勝。の。助。ん。意
い。の。の。ら。然。も。法。度。と。私。情。を。儘。と。自。由。ま。せ。ん。か。か。摸。稜。の。多。故。一。句。あ。り。徒。り。過
され。け。ば。有。司。們。の。言。せ。し。の。料。を。の。欲。小。稱。へ。敢。又。尋。思。及。び。之。縛。速。に。命。せ。ん。て。袖
内。守。記。右。衛。門。の。首。と。別。れ。泰。勝。并。敵。介。們。俱。は。追。放。せ。し。め。け。り。這。時。ま。も。連。小。六。を。召
城。内。の。旅。舎。在。り。國。司。對。面。せ。る。と。け。り。明。日。飲。と。な。程。英。虞。將。曹。と。明。星。三。郎。と。王
君。の。内。意。あ。れ。も。日。毎。小。六。を。訪。慰。め。て。あ。り。時。江。湖。上。の。物。と。い。ひ。銷。告。日。の。あ。り。又。の。時。を

武と講。古今の治乱を論。き。と。叮寧。不。管。侍。れ。小。六。の。國。司。の。安。不。同。病。者。有。ら
稍。瘥。り。也。と。も。沐。げ。浴。せ。し。め。れ。る。程。遠。く。は。沙。汰。の。也。と。答。る。の。長。春。の。日
尉。難。る。鄰。耳。房。の。晚。樓。の。風。零。果。て。新。樹。黄。る。三。月。の。天。も。下。三。四。日。あ。る。時。候。國
司。對。面。あ。る。と。將。曹。が。案。内。小。六。を。走。卒。の。末。に。小。六。を。勞。ひ。姑。具。寺。と。馳。て。准。備。の
礼。服。更。ぬ。て。坐。け。り。登。時。英。虞。將。曹。の。内。玄。關。を。出。迎。て。儲。の。席。を。誘。引。し。程。國。司。は。滿
泰。主。の。心。腹。の。近。習。の。三。三。左。右。に。て。書。院。在。り。對。面。せ。る。も。昔。縁。の。交。成。以
貴。賤。と。分。さ。ら。ず。鮮。て。相。譚。ん。與。る。僅。不。賓。主。の。坐。之。隔。て。身。邊。近。く。招。れ。と。小。六。は。向
容。を。膝。と。枕。め。て。病。後。の。安。不。同。を。問。ふ。と。滿。泰。の。又。い。ぬ。日。の。拵。を。原。因。以。て。快。對。面。を
べ。り。一。憶。き。風。邪。の。冒。さ。れ。て。那。快。び。と。舒。む。過。せ。急。慢。の。罪。を。犯。す。就。て。天。遣。來。不。泰。勝。を
罪。過。の。の。疑。は。れ。も。あ。れ。履。屋。在。実。と。糾。ま。せ。し。め。の。情。中。に。護。覺。の。事。の。起。本。城
原。の。稻。城。守。延。と。射。て。殺。せ。り。泰。勝。の。所。引。あ。る。若。黨。杉。内。守。記。右。衛。門。が。守。延。置。り



小六再謁司
水もろくやをむすよりのかへり
たしん我をうまひさあまのあま

お曹



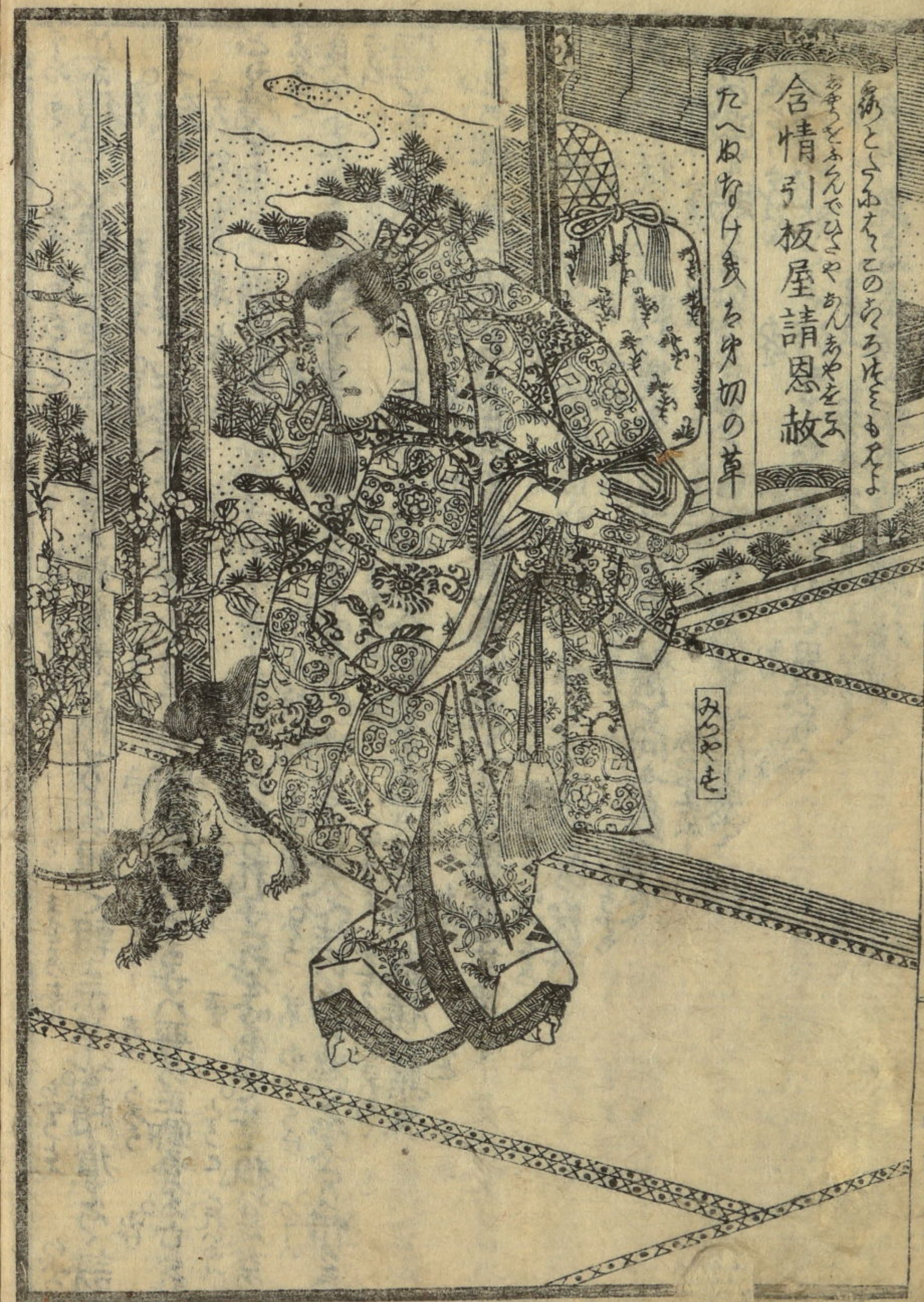
みやの市

有像筆廿五

W. A. ...

二十

...



あつとふたつこのあつはともえよ
あまのあまのあまのあまのあま
含情引板屋請恩赦
たへぬぢけあち切の草

みやの市

...

...

軍功のその折先太人言と氣の右大臣御の感状今今番の軍功被君美後子孫に罪ありとも
 七代は下と寫れ下と豫より傳ゆさあつ泰勝が陳常所と和內与記右殿の後
 度の招と申し啗合まつると後の如く計ひ及ぶの美と亮查あれり。と故実を引く當事
 陳謝の心六とるは膝を杖ぬ御談餘美をさるる然る由緒ありのま初より一緝
 捕の沙汰御對酌ありを既に禁獄せられて後古昔の思緒と云云と思召されし憚り
 又京志をすもる。信せられと諫とを識ると志同たが交るとは依りて
 行路の心あるとを信せられ且泰勝の罪過は左まれ右もあれ他が祖の忠義の顧り恩免の
 諫を如えられ信夫が親守延の忠義を思召れを傳ゆ守延の忠厚と文武長
 景義の國司の死改名京都將軍義満公の諱の一字に授られを諫及びの由當
 稻城守延の口言ふる非を陳く面と犯し諫京せ。外より放せられ他御す

二君は仕む猶當國の逸民とて非命の身故り。復た妻の不幸は
 その女見の二親の孝の望あり守延の忠信夫の孝の後々々の美談あるを憐れ
 正徳の何ぞと民の父母と願ふ稻城の後々々の忠と賞せられ信夫が孝と門閭表
 きて善と勸めあり微と悪徒の走る。乱臣賊子怕鬼。古の有道者の人小贈るの言
 して晩生弱冠鄙陋も身の分限をさる博士態を備え。越東來るわ成惶も
 先づ世の同朝歴仕の舊縁あり人の所を奉て忠告せま。故まの罪の最
 其の不敬と允らぬ。と肝胆と吐く明辨理論。英皇將曹のその近習も醉る如
 く醒る如く且感且沾。背汗を流け。その中満泰主の心竊に怒る。よの葉
 よの長者ののま。氣色も顯。つらと听果て。趣亦是理。信夫が孝の望
 然るのま。賞。但守延を忠臣と。信。南朝北朝の。中直
 らをのの足利を今。不。義満親意の旨を表し。諱の一字

平惣

同卷驚奇俠客傳第二集卷之四終

 第六當家子孫々伊勢の國司たる。其よりふと第七天に所望の事も報られた。其れ今
 番和殿の之を兼引れん疑ひ。あま舊縁と忠告の實義も答ふ事志を推し、推しひて
 懇切に説示して又路費の資ふと金二百兩二包と目録添て牽れられ、六を推し、推し
 ぶ、演別を告て又將曹ふ引れ、退去んとし、亦別席を餘食、応あり、登時小
 六を曹ふ就て所望の一美あり、何事と申入、又次の巻首、解分、分を聴か、
 旅亭の障り多、下知せんと、請人因てその木夾の、和殿の懐中、異日の證據、世
 らん、皇義、南北、兩朝、御合體、き、折鹿、死院の、沙汰、と、北島、名家、何れ、彼
 ら願、た、不條、允、志、と、叮、寧、ま、れ、六、第一、小、倉、宮、の、次の、御、位、即、ち、
 第六當家子孫々伊勢の國司たる。其よりふと第七天に所望の事も報られた。其れ今
 番和殿の之を兼引れん疑ひ。あま舊縁と忠告の實義も答ふ事志を推し、推しひて
 懇切に説示して又路費の資ふと金二百兩二包と目録添て牽れられ、六を推し、推し
 ぶ、演別を告て又將曹ふ引れ、退去んとし、亦別席を餘食、応あり、登時小
 六を曹ふ就て所望の一美あり、何事と申入、又次の巻首、解分、分を聴か、

市川 十 廻
 尾白帳
 折鹿死院
 沙汰
 北島名家
 何れ彼
 旅亭の障り多
 下知せんと
 請人因て
 その木夾の
 和殿の懐中
 異日の證據
 世
 らん
 皇義
 南北
 兩朝
 御合體
 き
 折鹿
 死院の
 沙汰
 と
 北島
 名家
 何れ
 彼
 ら願
 た
 不條
 允
 志
 と
 叮
 寧
 ま
 れ
 六
 第一
 小
 倉
 宮
 の
 次の
 御
 位
 即
 ち
 第六當家子孫々伊勢の國司たる。其よりふと第七天に所望の事も報られた。其れ今
 番和殿の之を兼引れん疑ひ。あま舊縁と忠告の實義も答ふ事志を推し、推しひて
 懇切に説示して又路費の資ふと金二百兩二包と目録添て牽れられ、六を推し、推し
 ぶ、演別を告て又將曹ふ引れ、退去んとし、亦別席を餘食、応あり、登時小
 六を曹ふ就て所望の一美あり、何事と申入、又次の巻首、解分、分を聴か、

